

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 上田 和彦

本論文は、哲学者エマニュエル・レヴィナス (1905-1985) と、形而上学的色彩の濃い評論・小説によって現代文学に特異な位置を占めるモーリス・ブランショ (1907- ) が、ともにハイデッガーの存在論を批判的に受容しながら思想的形成を行なった青年期以降、「〈私〉が存在することとは絶対的に他なるもの」—世界の全体性に組み込まれない「外部」—をめぐる、相互触発のなかで深めていった思索を跡づけるとともに、ある時期以後二人の間に顕著になる疎隔の内実を、後者から前者への問いかけとして捉える試みである。

主題は高度に哲学的で、フランス文学の論文としては異色である。しかし、対象テキストに密着して論を立て、あらゆる局面でテキストに立ち返って推論を展開する方法は、文学研究の王道とも言えるアプローチであり、本論文はこの点で十分にフランス文学の学位論文とみなしうるものである。

たとえば、幼児が、夜、一人寝かされた寝室で、眠気が訪れないまま、静寂の立てる騒音に耳を澄ましている状況を想定すると、そのときの子供は、人や事物に関わる昼の生活から遮断され、いっさいの存在者が不在であるにもかかわらず「存在の舞台」だけがざわめく「空虚の充満」のなかに身を置いている。何もないのに無は訪れず、存在者が存在するのは別様に何かがあるこの非人称の様態を、レヴィナスは〈アル〉 (« il y a ») と名づけ、これを単なる印象や心理状態としてではなく、人間に根源的な存在の仕方として把握しようとする。その際、彼は、ブランショの小説『謎の男トマ』から決定的な示唆を受ける。ブランショのほうも、レヴィナスの〈アル〉に強く触発されたことを明言し、一連の文学論・芸術論のなかで、この「中性的で、無にひとしい、際限のない実存、おぞましい不在、息を詰まらせるような圧縮」を執拗に論じる。死への不安に規定されたハイデッガーの存在論においては、〈存在〉が存在者によって隠蔽されてはいても、個々の存在者はどこかで〈存在〉とつながり、「〈存在〉の真理の場に立つ」ことが人間の「本質」とされるのに対し、レヴィナスとブランショの注目する、存在すること、明日もまた生きねばならないことへの恐れに規定される様態にあっては、存在者から切り離された〈存在〉、「実存者なき実存」が問題となる。

本論文第一部では、このように、ハイデッガーの批判的受容をとおして思索の基盤を構築してゆくレヴィナスとブランショの共鳴のプロセスが、二人のテキストおよびハイデッガー『存在と時間』の突き合わせをとおして、綿密に跡づけられる。

第二部では、1950年代後半から顕著になる、〈アル〉をめぐる二人の離反に分析の重心が移る。レヴィナスは、他者と無私無欲の関係を結ぶことで〈アル〉の脱中性化が可能で、他者は〈アル〉からの脱出を容易にする「援助」をもたらすと考えるようになる。さらに、

この〈アル〉を、他者に対する〈私〉の責任を命ずる〈神〉＝〈無限者〉と同一視するにいたる。ただし、思考に現前しないこの〈神〉は、経験の対象とはなりえず、いつ発されたかわからない命令を、一個の外傷（「痕跡」）のように〈私〉の中に忍び込ませたとされる。否定神学的色彩の濃厚な倫理へと傾くレヴィナスの転換を懐疑的に追うブランシヨは、あくまで中性的混沌としての〈アル〉にこだわり、これに神的な絶対性を付与しない。

引き受けることなく負ってしまう他者への責任のなかに〈アル〉からの解放の契機を求めるレヴィナスの「希望の言説」と、〈神〉の他性も〈アル〉の他性も絶対的に未規定な〈他〉としてしか到来しえないとするブランシヨの「忍耐の言説」との距離の確認、そして後者が前者に差し向けることを止めなかった問いかけの確認で、本論文は結ばれている。この先に、この問いかけじたいを意味づける作業が必要となることは言うまでもない。また、レヴィナスとブランシヨが行なったハイデガー読解の一面性への留保が十分に示されていない点、倫理の地平に軸足を置くレヴィナスとは違って文学・芸術という表象の次元を主たる関心の対象とするブランシヨの思索が、はたして倫理の地平に向かう契機を含むか否かについての考察が不十分な点など、いくつかの指摘がなされた。しかし、これらはむしろ今後の課題であり、本論文に内在する欠陥ではない。それどころか、現代の思想や文学をめぐる根源的な問題をテキストの精密な読解に基づいて的確に捉え、これまで類似あるいは相違が断片的に語られるにとどまっていたレヴィナスとブランシヨの思想的交流を総合的に跡づけることに成功した本論文は、きわめて大きな成果を達成している。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。